

文苑

悲劇今はた

人物

シユナツ

當初アンメル夫人實はチエチ

フェルナンド

ルチ

家令

郵便局長の妻

譯者附記……郵便局長の後家にして旅館の女將を兼ねたり

アンヘン

カル

従者、取次とりつぎ

青葉若葉譯

## 第一幕

驛 舎

舞臺内にて郵便喇叭の響、郵便局長の妻

局長の妻 カル、カル

若イ者登場

若イ者 何か……

妻 復候何處どこをうろついて居つたのかい。さつさと出て行きな。そら郵便馬車か。御客様を御案内申して御荷物かたをた擔かかぎ申して來るのぢや。何んたつてまご／＼するの。そら又膨はれ面づらたしかい。

(若イ者舞臺を外はつすを後方うしろより呼びかけながら) 待ちよ。お前の愚圖魔なまを直なしてあげるから。宿屋の若イ者たら二六時威勢が好うて、馬鹿に元氣が能うなうてはならないのに。こんな頓馬せんまが間違ひにでも旦那様にあらう者から、夫こそ身代潰つぶしさ。わたしなんか重ねて亭主を持たうぞ。夢にも思もやしないが、千に一さうんを氣でも起こさうなら、わけも理由も外に有りやしあい。唯もう何んと言つたつて女子おんなの細腕やせうで一つではどんなに藻掻もがいたつて荷物の處置さばきがならむからの事さ。

ツンメル夫人、ルチー旅装たびやうにて登場。カル

ルチー (旅行草盤りょりんそうばんを提げながらカルに) 可うござんすのよ。重おもかないんですから。では御母様のおははさまを持って上げて頂戴よ。

妻 これは奥様に嬢様。當家の家内で御坐います。まあ大層好い機會にた乗り合はせになりました。

○不斷如此に早う参り参ります事は滅多に無いんで御坐いますよ。

ルチー 大變若い上に氣輕で至つて面白い馬車屋様に運好く乗り當てた者ですから。こんち馬車屋三とから世界中だつて乗り廻はして見たい位ですわ。加之私等二人限りで荷物が少いと來た者ですから。

妻 御仕度でもなさい升から萬望霎時御猶豫がた願ひ申したうムいます。一口未だ何の準備も御坐いませんから。

ツンメル夫人 妾にはんの少量ばかりソツプがた頼み仕たいのですが。

ルチー 妾ちつとも急がなくて。た母三の方を何卒かね。

妻 早速。

ルチー ソウスは飛切上等をね。

妻 持合せて居ります一番佳いのを。

(局長の妻退場)

ツンメル夫人 た前は何にも命令けないでゐて頂戴よ。旅行中に既う御前もいひ頃智慧がた附きたらうぢやないか。今迄呑み食ひに何時だつて實際以上拂はされて來なかつた時は無かつたぢやありません乎。別して今の境遇ですよ。

ルチー まだいつぞ困つた例もない僻に。

ツメメル夫人 だつて困らないばかりにあつてゐるぢや有りませむ乎。

(郵便馬車の馭者登場)

ルチー 馬車屋三どうかゝて。解かつた酒代が欲しいんだらう。

馭者 へい、特別仕立の馬車の様に駆けまして御坐いましやう。

ルチー と云ふのは増しをくれとの謎だらう、適中て。妾に馬があらうものなら、妾御前を妾の御者に備へてあげてよ。

馭者 馬をわ持ちにありませんでも折角御勤めが致したう御坐い升。

ルチー さあ。

馭者 有難う御坐い升た嬢様。もう此先へはた越しにならかいんで御坐いますか、

ルチー 今度は此處さりなの。

馭者 では御機嫌能う。

(馭者這入る)

ツメメル夫人 御前また大變に呉れて遣つたのでしやう。馬車屋の顔色で分かつてまさ。

ルチー だつてふつ／＼小言なむか聞かせ乍ら歸す譯にも行かぬぢや有りませむ乎。乗るから降りるまで、あれ程親切に世話して呉れたんですもの。た母様は何んだらうと妾の事を氣儘者の氣隨者のとたツしやるんだわ。そりやどうせ氣儘者でしやうよ。だつて何ンばなんだつて自腹を肥やす我利我利亡者ぢや無い事丈は、妾斷然言へやうと思ふは。

アンメル夫人　ルチーは前私の言ふ事を誤解へではないよ。私だつて前前の正直で氣質が善くて、物事に大度さのには感心してまさア。だが何んば德行だつて大抵時と處とがあらうぢやありませむ乎。

ルチー　母様此處本統妾の氣に適て。大方あすこの上の家が妾が此先御奉公申貴夫人の御屋敷おんでしやう。

アンメル夫人　此土地が前前の氣に入つてお母三も嬉しう思ひます。

ルチー　屹度此度閑静ですよ。妾もう先刻から然う想ふて居てよ。宛然廣場の日曜日の様だわ。奥様は如此に美しい庭を持てゐらつしやるのだが、どうでも良い方おのよ。妾見事御奉公がなるか當つて看たうあつてよ。お母三では。何んだつてさんおに見廻はすの。

アンメル夫人　何有何んでも無いんだよ。ルチーは前おんか、元來憶ひ起す事おんか頭からして皆無おんだから幸福な者や。嗚呼過ぎし方の偲ばるゝ、今昔の違へば、かうも違はるものか。お母三に取つては驟、舍に足を踏み入れるのが何よりの苦痛にんだから。

ルチー　お母三たら什麼した變お人だらう。何處に往つたつて苦勞の材料の盡きこゝしだから。

アンメル夫人　でも何處へ赴つたつて實際原因に事歛かおいんだもの。それよ。お母三がお父三に伴れられて、人間一生の中で一番楽しい結婚後の初年を、二人手を取りて誰憚からず廣き野山に賞翫した時の其樂しさ。耳にする物、目にする物一つとして身に取つて珍らう感ない物は無く、お父三の腕に擁かれ乍ら、馬車の上から疾せ過ぐ千々の物皆をあれよ、此れよと眺めた際と

言つたら。それは、平々凡々物までが面白可笑うてあらあかつたに、皆思へば父三の愛。御精神の業——

ルチー 妾もたんと旅行がして見たくあつてよ。

グンメル夫人 そして日中の暑さや、色々を難義不自由を目見た後で、又冬の悪るい道を通りぬげて、やつどの思ひでこれとは尙だ數層倍下等い宿屋に這入つて、至つて質撲ではあるが兎に角氣持ち好う感せらるゝ所に落着いて、一所に木製の一つ床几に坐りながら、一所にオムレツや馬嶺薯の煮ころばしを喫べた折の心地と曰つたら——ほんにあの時分の事といつたら、夫はそれは別世界の様で、今とは雲泥の相違

ルチー 父三の事から、最早大概ぶりに忘れにあつて可い時刻が来て居るぢやありませんか。

グンメル夫人 『忘れる』て前どんな事だか知つてゐて。前あんな未だ仕合せと取り返しのか付かないやうな物なんか失くした経験が無いんだからね。母三なんか父三に見棄てられて仕舞つたんだと言ふ事が明瞭してからとふ者は、此世に何の愉快も無くあつてしまつた位はまだも、失望落膽の餘り、身は生きて居るとばかりにて魂の無い藻ぬけの殻も同然神にも見放さされ果ては我身で我身が解らなくあつた當時の状態といつたら、ほんに夢の様で憶ひ起しもからぬ哩な。

ルチー 妾にもあの折の容子たら、妾も母三の寢臺の上に坐はつて居つた事と、母三が泣きあさつたから只もう悲しうあつて、泣いた事しか覺て居ないは。そを——其寢臺たら青い部屋の内につたつた小さい寢臺だつたわ。つつけに彼の家を賣り拂らはんんけりやあらあかつた時、

妾あの部屋にまあごんをに痛らいたもひをせさせられた事やら。

アンメル夫人　お前が頑是のない七歳の事だもの。何を失ふたやら御前に感事のあらう筈が無い。

アンヘンツツプを以ちながら登壇、局長の妻、カル

アンヘン　爰に奥様のツツプを。

アンメル夫人　憚りさま。この御子はあなたの娘三ですか。

局長の妻　腹異ひの娘なんです。御陰様と能く働いて呉れますので、自分に子供が御坐いませいでも、丁度うめあはせが附きますので、それが爲め別段不自由も致くませむ。

アンメル夫人　あなたは御忌中ですか。

局長の妻　宿が三ヶ月前に亡くなりました者ですから。連れ添ひましたから満三年とは経たないんですよ。

アンメル夫人　夫にいては中々斷念がた付きの様ですね。

局長の妻　わたくし風情の者は、いやもた耻しい次第で御坐い升が、何時迄も泣いたり祈りあご

致してをります譯には参りまむので、主の日も働きの日も差別の在つたものぢや御坐いませむ。ですから和尚三か御説教でも御始めにありますが、それともごあたかゞ挽歌でもた唱ひ下さり

ますのを耳にでも致しませぬ限り——カルセル、ペットを二本。そして此端の所に食巾を懸けてね。

ルチー　あすこの家はごなたの御住居なんですか。

局長の妻　私どもの御最負に預り升男爵夫人の御邸宅でムいますが、夫はく申分のないた善良い

方で御坐いますよ。

ヅンメル夫人 遠方でもつて、さる方が御誓言なされた通りを復御近處の方から承はつて私も安心致しました。實は娘がこの先夫人の處に御奉公申すことに成るだらうと思ひまして。

局長の妻 た嬢様どうぞ首尾能う参ります様。

ルチー 妾ごうか奥様のた意に入る事が出来れば可いかと夫ればつかしを願つて居ります。

局長の妻 あの奥様との御交際がた出来にならない様では、御嬢様は餘程念入りの風變りで居らつしやりますよ。

ルチー それから尙の事結構でさ。人の意を迎へんけりやからあい場合は、どうせ一生懸命にあらあくちや。であくちや勤とまらう道理がありませんもの。

局長の妻 では、何れ後刻此事に就いて重ねて御話致します事と存じますが、其節た嬢様は必然私の申し上げましたは眞實ことだつたと仰るにきまつてまさ。何人だつて彼の奥様の御側で暮らしになるから幸福なのは知れ切つてをるんですから。私の娘も今少く成人いたしまくたら、短うて一兩年は奥様の許に御奉公に差上ぐる覺悟に致してをります。娘が一生の徳になることで御坐いますから。

アンヘン なにか無しにた會ひにありません。佳い方たら。た嬢様を甚塵にいたはりになり升かは到底御想像がた付きにありませんまい。私見た様を者までそれはくた可愛りになるんすよ。なんから鳥渡いらつして御覽じませむ乎。私御伴致しますが。

ルチー 御伺うかがひするとなると仕度したくからして懸たれらむけりやあらず。加之たれに何にか喰べて行きたうもある

アンヘン あんかられた母三私丈一足先きに行つて見ましやう、そして奥様にた嬢様のた見ねにあつて居らつしやる事をた傳へ申して置きましやうよ。

局長の妻 往つて來るが可いよ。

ヅンメル夫人 奥様にね、御飯が濟すみ次第早速御伺うかがひ致しますて、さう言つて下さるんですよ。

(アンヘン入る)

局長の妻 娘は不思議を程奥様にあつて居るんですよ。夫に又奥様たら世間に又見られんほどの良い方ですて。

小供相手になさる事を唯一の樂みになさつて居らつしやるので御坐いますが、夫は種さま々の仕事を小供にた仕込みにありますの。唱歌だつて。而してた傍そばに召し使になつてゐらつしやる百姓の娘三の中で、さういふ鹽梅にた仕込の結果仕事の手が段々上達し、是ならば、もう一人前と見定めが付くと、聽きて何處どこへか好い口を探してた遣りになるんですよ。御主人が姿をた隠かくしにあつてから以降このちといふものは、始終かういふ風に月日をた過あごしになつて居らつしやるのですが、實の所あれ位薄あしあはせ 命いのちでゐらして而れで、ぞをしてあんなに御親切でた優やさしうしてゐらす事が出来るのかと合點が行かあい位あんです。

ヅンメル夫人 では奥様は未亡人みづかひでゐらつしやるのではあいんですね。

局長の妻 どうですか判然とは。兎に角旦那様と申す方は、三年前に何處へか逐電あさつた切りで、誰一人旦那様の影を見たと申すものも無けりや。旦那様の事を聞いたと言ふ人も無いといつた様を始末あんですからね。それに又奥様の旦那様を愛してゐらつしやる事たら、首切りと申しまうやうか。宿あなか御兩所の事に就て話し出さう者から、何時果して幕切りにあることやら、などと終局が無いんですよ。それにまだ言葉添へをして妾は。ほんにあんか方たら廣瀾世界にだつて二人とはないて、私自身にた受合ひ致したいくらゐでさ。奥様には毎年〳〵旦那様の御姿を最後に御覧にありました日にちに、缺かさず人拂ひをあさつて一室にた籠りにあります。常日頃だつて奥様が旦那様のた話をなさらうものなら、身につまされて、誰にしるた氣の毒に思はない者は御坐いませぬ。

グンメル夫人 御不運の方ね。

局長の妻 此事件に關きましてはた話すりや幾等もた話申すことが御坐いますが。

グンメル夫人 何んですて。

局長の妻 事件が事件丈にあまり人様にた話し致したくは無いです。

グンメル夫人 でしやうが、た願申しますから。

局長の妻 他の人にさへた漏らし下さいませんけりや随分奥様迄打明け申したつて故障へ無からうと思ひます。こをつと兩所の當所にた越しにありましたのは、本年でたつぶり八年にありまじやうよ。御兩所で莊園をた買入れになりましたが、誰も御兩所の御身分を存じて居らぬ者ですから

唯何かあしに且那樣奥様で通してをりましたやうな仕誼で。世間ではどうでも外國の戦争に従事あさつた方で、しこたま儲けにあつた揚句、休養かたたく御越しあつた將校だかんで、専ら噂致して居りましたが、當時の奥様のうい／＼しさと言つたら、精々た齡を召して十六の聲は未だ懸らぬ程で、其又艶麗さと申したら、天女の天降たど／＼か思はれなかつた相で。

ルチーでは現下でも二十四は越えて居らつしやらないのね。

局長の妻 奥様は芳紀の割にはたんと苦勞をかさいました。た一人赤子さんがたありになつたんですが、た生きにあると間もあく死くなられました者ですから、御庭園の裡に芝生でこさわたほんの記號ばかりの墓が御坐いますが、且那樣に逃げられてた仕舞ひにあつてからと云ふものは、什麼に感じにあつたのですか、其脇の處に一字の庵を御結びにある、おまげに御自身の墓までた建てさせになりました。亡くありました宿など老人で御坐いましたから、容易を事で物に動くやうな事は無いんで御坐い升が、でもた兩方の此處に御揃ひであらした内は、何よりもかよりも此御夫婦中の睦い御容子をすき好んで話して居ましたが、至極感じたんではなう、曾も如此事を申ししてをりました。た兩所の互に愛し合ふてゐらしやる状態を一瞥近邊で見ればかりで、氣分が全然變はつて、まるきり別の人間に化つたやうだつて。

ツンノル夫人 何だか私までが慕はう／＼あつて参りました。

局長の妻 何かし世の中の事と申しますと、甚麼成る通にか成行かない者と見えます。奥様の且那樣といふのは頗る付きの異つた主義を有つた方だかんであ評判が誰道ふとあく立ちましたか、

どんな事ですが私どもには一向分らないんですが、教會へ嘗て顔をた出しにあつた事のあい丈は確ち事實でムいます。誰に致しました所で今日御宗旨の無いとありや、元來神様が無いんで御坐いますもの、放埒を方に定まつてまさ。すると降つて湧いた様に且那様が去られたとの噂あります。何有且那様はとくに旅行して仕舞つてゐらしたんでさ。夫れあり限りで二度とた還りにならぬかいんですからね。

ツノメル夫人(獨白) 自身身の身の上すつかり其儘だわ。

局長の妻 恚うなると人の口には戸は鎖てられぬかいもので、寄ると觸ると此の一件で持ち切りと言つたやうな譯で。元來この十月のミヒヤエール祭で、私は若い女房で當地に参りまゝて以來、恰度滿三年にあるんでわムいます、そうあると各自勝手放題口から出まかせに申すものですか、ら十人十色で一つとして一致た説てな無いんですが。中には彼の二人は正式に結婚したのぢやないんだなご、人聞の悪い噂まで耳打する連中すらあつたのです。他言して下さつちや困りませんが。あの方は貴族でかの婦人を誘拐して來たんだと、まことしやかに話す人さへありました位で。あか／＼これどころですか、さま／＼の風説が立ちましたよ。それは。いやもう若い婦女子が恚ういう真擬を致しましたら、どうせ一生涯浮ぶ瀬なしでさ。

アンヘン(來る) 奥様が直ぐいらして下さる様に呉々も頼みにありまして御坐います。ほんの一寸話し申したいからつて、いや御顔だけに見せ下さりや可いんですて。

ルチャー なんだつて此衣裳では。

局長の妻 文句なく往らつしやれば可いんですのに。あの奥様はそんな事に頓着をさる方ぢやありませんよ。わたくしに保證よけあひ致しますわ。

ルチー あちた妾を伴れて行て下さつて。

アンヘン ね伴れ申します段ですか喜んで。

ツンメル夫人 ルチーや一寸一言ひとこと(局長の妻遠慮する)何事なんにもいつこ無ないですよ。わし達わたの身分だつて、身の上だつてですよ。奥様に叮嚀ていれいに御挨拶申すのですよ。

ルチー(小聲で) 可いといふことよ。大丈夫。妾のね父三は商賣人で亞米利加に行つて亡くあつたんで、夫れで我わたどもの境遇はちんでしやう。——ね母三妾に萬事ばんじを委かせにありませ。妾こんな這な麼な譚はなしからたんとした經驗けいけんがありますから(聲高に)お母三暫やく休やすまゐくて。ね母三はね休みにならあくちや可よけないんですよ。ね上三かみさんが今に小じんまりした寢臺ねだい附の部屋へやを世話してくださるでしやう。

局長の妻 機會きかひ好よく前裁ぜんさいの裡うちに小瀟洒せうせうした閑靜かんじやうをね坐敷ざしきが空いて居ります。(ルチーに)奥様があたの御意ごいに協きやうひますやうに祈いのり致します。

(ルチー、アンヘン退場)

ツンメル夫人 娘は未だどうも高慢こうまんちきを、所が在つて困ります。

局長の妻 一一ねわ若わかい方は皆三さうした者で御座います。御氣位ごきいの高いのはもう治なをりまじやう。

ツンメル夫人 ではますます閉口へいこうでさ。

局長の妻 奥様た宜敷ばどうか此方へ。(兩人這入る)

三十八

舞臺内にて郵便喇叭の響、フェルナンド士官の服装にて従者と登場

従者 早速最一度馬を附けさせましやう乎、そして御荷物をも積み入れさせて置ましやう乎。

フェルナンド 貴様一つたれの荷物を擔ぎ込んで呉れ。屹度命ひつけたぞ。此れから先には行かないんだ。いふか。

従者 先には行かゝいて？且那様は先刻……

フェルナンド 何だつて可いや。部屋をこさへさして、たれの荷物を其處に運ぶんだ(従者退場)

フェルナンド(窓際に歩みより) でも極樂の様の眺望よ。縁あつて御前に再び會へたかい。乃公が

あらゆる幸福の舞台よ。この様に御前に再び會へよとは。あの全家は、まあ何とした静かな事ぢや。どの窓も一ツとして開いて居らむは。廊下のあの荒れ様は甚麼ぢや。宛度無住の様ぢや。二人打揃ふて幾度もく腰かけたのは正しくあの廊下あのぢや。フェルナンドよ。彼女が住み家の寺の様を光景はまあ程た前の希望に床いき思ひを與へる事やら。いたが獨住居の其間彼女の思ひの種子。彼女の活動のほだしとあつたものはフェルナンドであつたらうか。だがフェルナンドはしかく彼女に苦勞させる丈の資格があるか。たオー自身は冷たい樂みの無い永劫の眠からさながら蘇生つた様な心持がする。嗚呼され見ても是みても生いきして意味の深くない者は無い立木から泉から何から何迄瞻昔ながらぢや。水のある筈から流るゝけはいたら。憶憶へは幾千度だつたらうかあれと一所に。物思ひに沈み乍ら、あの牕から瞰下るし果ては茫然とてかたみに

無言で只もう水の流に見入つた昔の姿其儘ぢや。あの水音は我爲の諧音ぢや。往時を憶はず妙ある樂ぢや。それで彼女は？彼女が何んしに心變りかどするものか。シユテルラ御前は必然昔時の儘ぢや。誰あらう乃公の心が歴然其様に曰ふてをる。逢ひたさ一杯で、まあ何とした心鹿の搏ち方だらう。何ぼう逢ひたうても乃公は往きたくない。又行く事が出来ぬ。取敢へず心を落ち着けなくちや。先づ何より自分は實際此處に居るのだと言ふ事を充分會得せなくちやあらぬ。而して復いつもの様に夢に欺騙れてをるんぢや無いといふ事を熟くと承知した後であくちや。噫想へば從來幾度この乃公は夢に伴れられて現まばろしに雲井遙けき異國より此里かけてさすらひ出でつる事よ。シユテルラ、シユテルラそれがやつて來たぞ、お前は私の近寄りつゝあるのに氣が付かないか。お前の腕に擁かれて此歲月の憂苦勞を殘らず忘れやう爲め——哀れを亡妻。儼し御前か私の身邊に得浮ばないで居から勘忍せよ。許るして呉れよ。お前は既う此の世に居あいたから、もうお前の事は忘れさせて呉れ、あの天女の腕に抱かれて何にもかも忘れさせて呉れ。我が數多の不運から、あらゆる損失種々難み煩ひより後悔まで一切。——我は今彼女の近隣にをりながら心は遠い様を感事かする——兎に角今一瞬間の裡に——到底もどても。まあ——精神を静めなくちや。であらうば乃公もう彼女の脚下に氣絶せむばかりぢや。

局長の妻(登場) 且那樣御仕度は奈何で御座いますか。

フエルナンド 準備が出来るか。

局長の妻 出来てをる所ちや御座いませむ。あすこの奥様の處に御越にやつてゐらつしやいますか

嬢様を折角御待ち申してをる所存んです。

フェルナンド あの奥様は御機嫌が能いかね

局長の妻 且那樣御存知でゐらつしやいますか。

フェルナンド 以前には随分度々伺つた事があるよ。且那樣は甚麼してゐらつしやるかね。

局長の妻 皆無知らぬいんですよ。何んでも遠國に入らしたには相違ないんですが。

フェルナンド 逃げたのか。

局長の妻 無論ですよ。可愛い方を振捨てにまつて。まあどうか御罰が當らなけり可いと思ひ

ますは。

フェルナンド 奥様御自身に什麼にか既う觀念を御付けになつたらうよ。

局長の妻 塵那に想ふてゐらつしやるのですか。では且那樣は奥様を御存無いのも同然で御坐いま

すよ。どうして奥様たら、妾が親昵にまつてからと申す者は塵の世を遁げになつて、尼三の様

に寂しうた暮らしまつてをられます。從て他人と申したら殆ど誰一人、御近所からだつて御訪つ

ねにある方はありません。たゞ召使を相手に其界限の小供を誰かれの差別なく御集めにまつて日

を送つてゐらつし升が、御心痛の有りなさるに不係、常住坐臥に優しく愉快さうにしてゐらつ

しやいます。

フェルナンド 兎も角を訪ねて見やう。

局長の妻 萬望さうなさいまし。奥様は又毎度た役人の奥様や牧師の奥様やらと一所に妾を招き

にありまして私どもを相手に何にかと世間話をあさるんで御坐いますよ。尤も私共精々注意して且那様を思ひ出させます様な話は、一切謹むで居りまうたが、到度只一度失策しつじやくましてね。するどさの大變。奥様は且那様の事をかにかくとた口説くせきにありまして、た賞めなるやら、た泣きになるやら、夫はそれは彼の時ばかりは本統ほんとうに甚ぜう厭すれば可いかと思ひましたよ。結居はては且那様。私共一同身につまされまして覺おぼえず小兒のやうに泣き出しまうたが、幾ほとと何時いつまで經つても泣き止め相にも御坐いませんでうた。

フェルナンド(獨言) 決して那そんな麼苦勞をかけられた義理じやないに。過分なぞね。(聲高に)それはさうと乃公の下部に部屋を周旋して呉れたかい。

局長の妻 貳番を、た二階の。カル御案内申せ。(フェルナンド若者と這入る)

ルチー、アンヘン登場

局長の妻 いかゞで御坐いました。

ルチー ほんに可愛い奥様たら。あの方とあら。た上三。眞實まごころあまたの言はれた通りよ。奥様たらどうしても私を離さうとなさらあいから、私た食事を濟ませたら、た母三かあと一緒に荷物携帶せりで是非た伺ひ致しますからッて、堅く誓約ちやくして辛とた違を貰つて來た様を譯よ。

局長妻 さうだらうと思ふて居りました。只今御仕度をなさいますか。今た一方背の高い立派な士官が馬車でた着きになつてゐらつしやい升。御厭ひあくば。

ルチー 何に些ちども、どちらかといや軍人相手の方が他人相手よりかよござんすは。軍人ですと大

抵見わた通ですから、一目瞥りや直きと善人が悪人が判ります。お母三は眠て居ります乎。

局長の妻 存知ませんで御座います。

ルチー とも角お母三の御容子を

(退場)

局長妻 カル。そら復鹽入を忘れて。これでも洗ふたと稱へるのか。まあ見あさい此コッパを。お前が此コッパ程責めて價値のある男なら、御前の頭に此コッパを投げつけて眞二つに砕いてやるんだげぞ

(フェルナンド来る)

局長の妻 先刻た話し申しましたた嬢様が歸てた見ねにありました。程あうた食事にこちらへた出でにありましやう。

フェルナンド 一体どういふ娘あんなか。

局長の妻 全く知らない方あんです。ですが御見受申す所善い素性の方のやうですが、財産はた有りあざらん様です。今から奥様に御奉公あさる御積りなんです。

フェルナンド 若いのか

局長の妻 大變た若くあつしやい升。無遠慮の方で。お母さんも上にお出でにあるんですが。

ルチー 来る

ルチー 御免下さいまし。

フェルナンド いく御相手を御得まして誠に幸福に存じます。

(ルチー一禮する)

局長の妻 こちらへた嬢様。そして旦那様は何卒こちらの方に。

フェルナンド た上さん。あなたも一つ仲間入をくっては。

局長の妻 いふね。妾が休みましやう者なら、それこそ總休みですわ。

(退場)

フェルナンド では差詰差むかひと言つた様な譯ですわ。

ルチー 真中に食卓が御坐いませんけりや。眞平御免を蒙るところなんですわ。

フェルナンド 今後は男爵夫人の許にた越になる事に御決定おされた相てすわ。

ルチー 多分さうせんけりやあるまいと思ひ升。

フェルナンド あかたになら男爵夫人より一層面白いた話相手が殿方に幾等もありましやうに。

ルチー 存じませんよ。

フェルナンド 眞面目で被仰るんですか。

ルチー あなたも世間の男の方の通りですわ、た見掛か申すところ。

フェルナンド ど申すと。

ルチー 憚るがらあまりた田が過ぎは致しませぬか。あかた方には女が無くちや夜が明け無いと見

えますわ。夫は兎も角もとして私などは男あしに大きく成つて参りまうたのですから

フェルナンド ではた父様は最ういらつしやらかいんですわ。

ルチー 一人御坐いましたが全く覺わな位です。た父さまが亞米利加三界に旅行をおさらう爲め、

妾どもをたふり捨てにあつた時分には、何分自分は未だ若う御坐いましたからね。人傳に聞きや  
た父さまの船は沈没したとの事です、

フェルナンド 夫にうてはあまり平氣過ぎるやうですね。

ルチー 何に毛頭不思議は無いんですよ。親とは名のみで、ねつから妾を可愛がつてくれあかつた  
んですもの。た父三が妾どもをふり捨てたからつて妾は強て父を怨めしとも什麼ども思ひません  
が——甚麼人間には爲體放題より貴いものはないのですから——かし苦勞の餘り死ぬる程にな  
つてゐる私のた母様の體には自分はなりたくはありませむ。

フェルナンド ではああなたは保護者も世話する人もた持ちにならんのですね。

ルチー 何うに其様あものが入りますもの乎。私どもの財産は日々細くなりましたが、其代りに私  
の身体は日々大きくなりましたから、妾の腕でた母三を口過ぎさせる位の事は大した骨折でも御  
坐いませむもの。

フェルナンド 御勇氣にはほど／＼驚嘆致し升。

ルチー いふに、勇氣と申す者は自然と生じて來る者で御坐います。人と言ふものは度々死む様な  
目に遇ひますか、其度ごとに不思議に助かつて見ますと、自信力はをのづと付てまゐります。

フェルナンド 其自信力、其勇氣の幾分なりとも、あなたの母御に割與てた上げになる事が出來か  
いんですか。

ルチー 遺憾な事は不幸を見まゝたは母でして私でないの御坐い升。妾にして見ますと妾を早く

憂き世の浪風に投じて呉れまゝたのは、結句父の情と感謝致してをるので御坐い升。私の今日元氣能く満足して此世を渡る事の出來ますのは畢竟其賜物ですからね。しかし母三にして見ますと——此世のあらゆる希望を悉く父に維で居つたのです。浦若い花の盛を父に捧げて居つたので御坐い升。それに見捨てられたのでござい升。不意に見捨てられたのですもの——天地かけて頼みし人に見捨てられたのだとの心情は、まあ奈何でござい升か。眞に氣絶せむばかりにあつたでしやう。私は母とは違ひ未だ何物をも失ふた覺は無いので御坐い升。従つて『失ふ』と申す事に就て、話す能力は無いので御坐います。——どうか爲さいましたか。た考へ込みの様ですか。

フェルナンド いやた嬢さ。誰にしても婆婆に生活する以上は失ふものです。(立ちあがり乍ら) かく又得る慣習ですから。どうか何時迄も元氣で居てなさるやう。(ルチーの手を取り) あなたには一方ならず驚かされまゝた。た嬢様あなたは仕合せを方ぢや——恠く申す私も實は此世界で色々を、いや實に何度も何度も希望も——喜も——だが妙に何時も——その

ルチー 何んどれつしやるのですか。

フェルナンド あなたの御運の目出度からんやう、萬に吉事の伴はむやう満腔の希望を捧げます。

(退場)

ルチー 變な人だわ。しかく惡氣はなさ相に見ねる